『モデスト・ミニョン』：文明の視線

―― 手紙、新聞、肖像、噂 ――

博多　かおる

序

書物、新聞が若い女性を堕落させる、という「悪しき読書」の考えは、少なからずの小説に題材を提供してきた。『人間喜劇[1]』の中では、まず『村の司祭』が思い出される。そこでは、主人公ヴェロニックが『ポールとヴィルジニー』を読んで抱いた欲望が、後の犯罪につながっている。読書熱にとりつかれた若い女性の行動と家庭の道徳との融和の可能性を問う『モデスト・ミニョン』さえもが、19 世紀のある読書雑誌の記事の中で[2]、危険な本とされ、「この本は若者には厳しく禁じられるべき」という評価を受けているのは興味深い。一体この記事の筆者は、読書によって想像力が高ぶった少女のイメージを与えることを恐れたのだろうか。あるいはまた、この小説が女性読者に、今度は自分が作家に手紙を書いてみよう、という気を起こさせ、新たなモデストを作り出すことを恐れたのだろうか。

私生活と作品の間に、ある種の循環が存在することは確かである。小説の筋と生成過程の関係が、すでにその一つの例を見せてくれる。モデストと彼女の相手の間の文通は、バルザックとハンスカ夫人の文通の始まりを思い起こさせる上、このハンスカ夫人が小説家に送った自作の小説の断片が、『モデスト・ミニョン』に結晶したのだ。人生と作品は交錯する。なぜなら、そこで人々は文学的な状況を「生きて」いるからである。当時の文学界というものが、この小説の基礎の一つを成していることは否定できまい。この作品は、作家を「製造」しているという自負をもつ出版社、詩人のファンである若い女の子の手紙に詩人の代わりに答えるために警句を書きなぐるジャーナ

---

[1] この論文の中で、バルザックの作品の出典指示は、すべて新プレイヤード版(1976-1981 年刊)に依る。『モデスト・ミニョン』からの引用については、引用の度ごとに、この版の第一巻の中での該当ページを(　)の中に記すことにする。

[2] *Bulletin de censure*, 1845 年一月号、« Romans, Contes et Nouvelles »欄。Voir René Guise, « Balzac et le "Bulletin de censure" » in *L'Année balzacienne*, 1983, pp. 269-301.

リストたち、商業としての文学、「印刷、製紙、出版、活字鋳造業」(646)を必要とする、形而下的側面から見た書物の製造、などを描き出している。同じく素描されているのは、文学的創造における女性の位置である。「紙入れに詩を入れて持ち歩いている」(526)「靴下の青い」女性たちもいれば、「天才」が恐らく存在するであろう作家の世界に幸福を求め、そこに匿名の手紙によって忍び込もうとする女性たちもいる。

文学を作るために複数の手を必要とするこのような状況においては、それぞれが独自のやり方で自分の人生をそこにつぎ込んでいる。しかし、もしこの小説の主人公のように、一人の女性が、それまで家族にも黙っていた心にしまわれた秘密をそこに持ち込み、作家と呼ばれる、実は上で挙げた様々な「文学製造業者」たちを通してしか知ることのできない男性と結婚しようとしたならば、そこには何か矛盾が生じないだろうか。メッセージの発信者にとって受信者の姿がはっきり見えないほどに通信網の広がった世界で、私生活の秘密はどのように伝えられうるのだろうか。ここに小説の問う一つの問題が存在する。「個人的な」ものは、「集団」によって支えられている経路を通って伝えられるだろうか。人はそこで、媒介となる無名の存在たちが作る「不透明さ」を通して、メッセージを送らざるを得ない。

この点に関して、小説家は警告する。バルザックは若い女性読者たちに呼びかけ、「最も注目に値しないような行動までも注意深く観察している」(530)視線の存在に気をつけるよう促している。ここでは、文通する者たちが相手に告白する秘密のみが問題となっているわけではない。氏名、年齢、財産、払っている税金、といった種類の個人についての情報が、秘密を探ろうとする視線の対象となるのである。モデスト・ミニョンのように名前を隠し、その父のように財産の額を隠すのは賢明である。なぜなら、これらの情報をつかみたくてうずうずしており、情報を濫用する用意のある、簡単には目に捉えられない人々が存在するからだ。

バルザックは、この詮索好きで名の知れぬ視線の増殖を、成立しつつある「国勢調査」と結びつけ、この調査を「文明(civilisation)」の活動の一つとみなしている。この「税金台帳の上に隅々まで描き出された国土の全体を所有しようとしている」(530)文明というものは、コミュニケーション網をも装備しており、その中には郵便のネットワークも数えられる。1847年に、郵便に関する一つの調査が「農村地帯に散らばっている、人の住んでいる場所を調べる」ために行われたことは、興味深く思われる。調査の目的は、「農村の郵便配達夫が少なくとも二日に一回は訪ねるべき、人の住んでいる場所を

総て記載した『郵便事典』を作る[3]」ことであった。1835 年の『郵便事典』が古くなってしまったため、改訂と、1830年に始まった、郵便局のない農村地帯への郵便配達夫の巡回をより確かな物にするための追加とが必要になったのである。そこには、より細部へ、フランスの国土のどんなに知られていない部分へも入り込もうとしている行政の目というものを見ることができる。その少し前の時代には、手紙の受取人は「あらゆる機会を利用して」郵便局へ郵便物を探しにゆかねばならなかったことを考えれば、調査は住民にとって恩恵を施す役割を果たしている。しかし、これから我々が見てゆくように、これらの文明の視線は、他の視線をも同じような意味で詮索好きにする、一種の伝染病の源となっているのだ。小説の中でこれらの視線が益になるものへと転ずるためには、文明が「進歩の公益」をもたらすのを受け身に待っているのではなく、登場人物たちが、自分たちの利益になるよう、不都合さを利用する術を会得することが必要とされる。

そして、もし世の中がこれらの視線でますます満たされてゆくとしたら、本当の感情を伝えるため、また隠された真実を見つけるためには、いかなる通信手段を用いたらよいのだろうか。文通という手段は、秘密を預けるに値するであろうか。こうした疑問を持つこともなく、モデストは、家に閉じこめられている状態から脱出するため、手紙という手段に盲目的に飛びつく。詩人の天才と手紙によって会話する必要があるのだ。バルザックの小説の中で、手紙がしばしば、それ自体の欠陥や、盗難、偽造などの事故にも関わらず、優れた告白の手段、秘密の交換の場となることを我々は知っている。そこでは、「名」の問題も重要である。モーランクール男爵夫人の名を語って偽の情報を伝えるフェラギュスのように、また、この小説の中で詩人カナリスの仮面を被ったまま手紙を書くラ・ブリエールのように、もしかすると、自分の意図を実現するためには、何かを書くにあたって本当の自分の名を隠した方が賢明なのかも知れない。小説のヒロインは、匿名、或いは明らかな偽名の覆面を選ぶ。彼女は文通相手の人柄を高く評価し、実物が手紙を通して見た理想の男性像に一致しているかどうか調べるため、ル・アーヴルに彼を呼ぶ。そして期待していたよりもさらに素晴らしい男性を教会の中に発見する。ところが、仮面は、秘密を守るのに役立つのと同時に、他の仮面を呼び、本物の探求を複雑なものにする。遠距離のコミュニケーションで目に見えなくなるのは、仲介者のみでなく、メッセージの発信者、受信者でもあるのだ。

---

[3] Roger Chartier, *La Correspondance, les usages de la lettres au XIXe siècle*, Fayard, 1991, p. 18.

おそらく、真実を知るためには、自ら仮面をはずして直接自分の姿を見せ合わねばばならないのだろう。ところが、実際の視線の洞察力も疑問に付されねばならない。小説は本当のコミュニケーションを探すが、そこにはかなりの苦労がつきまとう。一つの場所に登場人物たちを集め、選ばれるのは、最も直接的で同時に行われるコミュニケーションであり、最終的に、匿名の文通によって行われた選択と、直接の交流によってなされる選択とは、和解させられることになる。

ここでは、人々の生活を調査する「文明」の視線と、個人の詮索好きな視線との関係について考えることにしたい。また、「文明化された」コミュニケーション網の中でのこれらの視線の役割を探ろうと思う。そこでは、メッセージを運ぶ手段は、集団の、無名の存在たちによって支えられている。秘密と、文明の道具によって私生活の秘密を明るみに出そうとする欲望との衝突によってかき立てられる、小説のダイナミズムを解明することが必要である。

1. 文明という巨人

モデストの三通目の手紙を受け取ったラ・ブリエールは、少女が手紙の中で自ら述べたてている長所が本当かどうか調べるため、郵便馬車に乗ってパリからル・アーヴルへ移動する。前もって自分で彼女に送っておいた手紙を追いかけ、彼は手紙を待っている金髪の美少女を、ある窓辺に見出すことになる。彼は一人の通行人にその家の持ち主の名を尋ねるが、その男は得意げに、ヴィルカン氏というル・アーヴル一の武器商人の家ですよ、と教えてくれる[4]。ラ・ブリエールは、郵便局長からヴィルカン家についての情報を得るためにル・アーヴルへ降りてゆき、そこで、少女が手紙の中で述べていたこ

[4] ヴィルカンというのはモデストの隣人の名で、彼らはかつてミニョン家が所有していた素晴らしい家を買い取って住んでいる。ヒロインの住む「シャレ」と呼ばれる小さな家は、前者の家に属している。Nicole Mozetはバルザックの作品における地方都市としてのル・アーヴルの位置について、また、ル・アーヴルと、それを見おろす住宅地であるアングーヴィルの関係について分析している。(Voir Nicole Mozet, « Le Havre : Larègle du jeu (*Modeste Mignon*. 1844) », in *La Ville de province dans l'œuvre de Balzac*, SEDES, 1982, pp. 264-270).さらに、興味深いのはヴィルカンの家と「シャレ」の関係である。「シャレ」は、「友人にしか住ませられないほど」前者に隣接して建っている。そこでは登場人物たちが混同される。一方ではこの箇所のように人違いがあり、他方では、求婚者の循環が起きる。かつてのモデストの許婚者は、ミニョン家の破産後、彼女を捨ててヴィルカンの姉娘と結婚する。エルーヴィル公爵は、ヴィルカンの末娘との縁談がまとまらず、モデスト・ミニョンの求婚者の集いに参加することになるのである。

とと一致しない情報を得る。しかしながら、少女の美しさに打たれて、彼は「金持ちであろうが貧乏だろうが、美しい心を持っているなら、喜んでラ・ブリエール夫人にすることにしよう」と考えて文通を続けることを決意する。

住居の地理的な複雑さゆえに少女の名を間違えたものの、彼は少女の姿を見ることに成功し、モデストはもう少しで名を知られる危険にさらされる。語り手は、彼女がこの危険から逃れ得たのは、手紙の中で用いている匿名、正確には偽名のヴェールのお陰だとする。しかし、この手紙におけるヴェールも、ヒロインを実際の生活における無名性が持つ不透明さの中に葬り去るには不十分のようである。

ここで語り手が介入し、次のような長い演説を繰り広げて、フランスの女性たちに、「文明の視線」が彼女たちの生活を窺っている状況を警告する。

> 公共の広場に馬車の出発・到着時刻を記し、手紙を数え、手紙が投函された時刻、配達された時刻、二重に印を押し、家に番号をふり、家の窓、戸口の数を調べあげた後、税金台帳に階数を記載し、隅々まで、最も細かい輪郭まで土地台帳の上に描き出された国土をまもなく残りなく所有しようとしている ——まさに、巨人によって命じられた巨人のなせる業としか言いようがないではないか ——、この文明のただ中で、かわいそうなフランスの女性たちよ、名を知られずに、ささやかな恋物語を紡ぐよう、せいぜい努力するがよい。うかつな娘たちよ、逃れるべきは警察の目ではない。どんなに小さな村でも、この上なく人の目を引かなそうな行動まで調べ上げ、知事の家のデザートの皿の数を数え、どうということのない年金生活者の戸口にメロンの皮の筋を見つけ、「経済」の手が金貨を財産に加えるとき、その音を聞きつけ、小郡、町、県の財産を見積もる、この絶え間ないおしゃべりから逃れるよう、心するがよい。(530)

語り手は、女性たちに、この上なく罪のない、家庭の中での出来事さえも調べあげようとする視線から逃れるよう忠告している。ある場所で、ある時間に、手紙を待っていることを知られないようにすることも、恐らく必要であろう。これらの視線の対象は、警察が興味を示さないようなことである。その基準は道徳性ではなく、一種の好奇心である。では一体どのような好奇心だろうか。

鍵となる言葉は「文明」である。ここでは、対になる二つの概念が問題となっている。一つは、「進歩」の概念に関係するものであり、この箇所においては、近代国家によって進められる一種の国勢調査を支える好奇心を指している。「文明」は、国土、人民、そして彼らの活動を、国家の帳簿の大きな紙の上に記録する。そこには、フランスの国土の上にあるもの総てを、数

字が支配する言語によって描き尽くそうという途方もない欲望がある。もう一つは、一個人の私生活に関する情報をも探知するということから始まる好奇心に支配された情報の獲得と伝達が、次第に、住人たち、捉えきれない大衆の間に広がってゆくということである。この二つの現象から、まず、情報の「数字化」、つまり戸籍などの数量を記述する言語への転換が起こる。それぞれの生活が、「デザートの皿の数」、「メロンの皮の数」などで語られる。その一方、コミュニケーションにおける主体の脱人格化が起こり、逆に、「文明」の人格化が起こるのだ。「巨人」の仕事のために働く人間たちは、すぐに巨人の無数の手足の一つとなり、かれらの目はこのアルギュスの目の一つとなってゆく。ここに我々は、『フェラギュス』のパリの描写を支配する論理に似たものを見出すだろう。『フェラギュス』において、パリは自立した「怪物(monstre)」であり、最強の男であるフェラギュスをも含んだ、あらゆる住民の運命を弄ぶ。しかし、家、通り、住民はパリという名の怪物の一部であり、その一人の住人の気まぐれな好奇心が不幸を呼び、怪物の他の構成要素がそれを助長する。バルザックにおけるこれらの人格化は、おそらく集団の中の匿名の人間たちの間に生じるコミュニケーション、そこに生じる、メッセージの発信者及び受信者が確定できなくなる現象に対する、作家の深い意識から生まれているに違いない。

ところで、小説の中で、このような「文明化された」コミュニケーションは、具体的にどのような形で現れているだろうか。モデストは手紙の中で次のように書いている。

> 私の一通目の手紙は、道にそってぶらぶらと行きながら、果樹の垣根の陰に隠れて税金の査定額を読み、家の所有者を恐れさせて喜ぶ子供の投げる石ころのようなものではありませんでした。(537)

こうしたいたずらな子供の視線は、「文明の視線」の描写と通ずるものがある。女性読者が作家に宛てた手紙も、作家の私生活の秘密を知って面白がろうとする、好奇心に満ちた視線の一変化でありうるのだ。モデストが示そうとしているのは、このような偶然と気まぐれに基づくような行動は、心の結婚の対象として選んだ詩人の天才という定められた目標を、正確さと慎重さをもって狙う、彼女の計画の対極にあることだ。モデストはこうして、彼女を一人の無名で好奇心に満ちた女性読者としかみなさない「マスコミュニケーション」から、独自のコミュニケーションの在り方を区別しようとしている。後者の中では、彼女は匿名のままに留まりつつも、匿名であるが故に、

手紙の文章の中で正直に表現された性格を身につけた個人として存在できるはずなのだ。しかし、彼女は、夫にしようとしている天才を「釣り上げる」仕事のために、集団のための通信網をも必要としている。出版者、ジャーナリスト、秘書など、「天才」を取り巻く人々が連携し合う文学的状況の中を通って行かねばならないのだ。そもそも、「郵便」は、文明の道具の一つである。文明化された情報網を飼い慣らし、内密な情報を伝える手段に変えるには、「私生活をのぞき見る文明の不都合さ[5]」を良く知ることが必要だろう。

2. 郵便

小説の中で、手紙はありふれた「物」であり、匿名の手紙というものも珍しくはない。「この仮面の物語にとって手紙は不可欠な要素であった」が、その手紙というものは「物語の真実性を支え、心情の吐露を可能にすると同時に、偽装、嘘、人物の入れ替えなどをも可能にする、古くからある手段である[6]」。バルザックの作品の中で、ありふれているが、また多彩でもあるこの手紙という手法は、この小説において他のコミュニケーション手段と協力する時、また新たな側面を見せる。さらに、明らかなことではあるが、手紙が、制度としての郵便に多く依存していることを強調するのも無意味ではないだろう。識字率の増加、経済発展によって郵便物が激増したことに加え、19世紀の前半において、郵便は様々な進歩を遂げている。すでに見たように、1830年の農村への郵便の配達、1849年には郵便料金制の変革[7]、また、切手の導入も行われた。もちろん、郵便はまだ、小説の登場人物の行動範囲全体を手の内に納めていたわけではない。外国からの郵便はしばしば、シャルル・ミニョンが知人の船に手紙を預けたように、個人的な関係を頼って届けられねばならなかった。しかし、人を移動させ、メッセージをもたらす、このエネルギーに満ちた郵便の働きは、バルザックの目に止まらないはずはなかった。それは『人間喜劇』に深く根を張っている。登場人物の間に手紙が呼び起こすダイナミズムの源泉を知りたいのなら、まず、この郵便制度を考えてみなければならないだろう。

---

[5] Maurice Regard, « Introduction » à *Modeste Mignon*, in *La Comédie humaine*, éd. P.-G. Castex, Gallimard, 1976, p. 465.

[6] *Ibid.*, p. 458.

[7] 郵便料金は「7グラム半以内の重さのものに関しては、フランス、コルシカ、アルジェリアの中でどれだけの距離をおいて送られようとも、均一20サンチームとなる」(Roger Chartier, *op.cit.*, p. 17)。その前の段階の、受取人によって、郵便の到着時に代金が払われるシステムは並行して存続するが、距離に比例して代金が決まるという料金制度は廃止された。

郵便は、個人的な手紙を運ぶ役割をしているのみならず、様々なもの、すなわち公的な書簡、新聞、定期刊行物、手形、書物、版画、リトグラフィー、名刺などをも運んでいた。この時代、郵便の配達はもちろん駅馬の制度に依存しており、小説の中に描かれている物および描かれていない物(書物やリトグラフィーの場合)の移動の多くは、これらの馬たちに牽かれて為されたと考えられる。一方で郵便網はしばしば人間をも運ぶ。“malle-poste”、“courrier”と呼ばれる速達便を運ぶ馬車は、幾人かの旅行者を乗せるのである。モデストが乗馬の練習のために美しい鞭を欲しがっていることを知ったラ・ブリエールは、急いでル・アーヴルからパリに向かい、鞭を探して二日後には戻って来ようとする。

> 「今 9 時だ」、エルネストはビュッチャに言った、「全速力で行けば、明日の朝 10 時には着くだろう[...]」
> 一時間後、郵便馬車に飛び乗ったエルネストは、12 時間でパリに着き、そこでまず、次の日のル・アーヴル行きの郵便馬車に一つ席を予約した。(664)

この恋する男が、モデストの装身具の上に美しい鞭を置かせた後、疲れ果てて倒れるほど急いで旅行するとしたら、デュメイもまた、「情熱か投機のみが車輪に刻むことの出来る速さ」(588)で、詩人の素行を調べにパリへと移動する。馬たちに牽かれた旅行の仕方は、それぞれの人物の役割を特徴づけている。ミニョン夫人の目を診察に来た高名な医師デプランは、「ル・アーヴルに馬を探しに行かせ、それを馬車につける間、およそ一時間しか留まらなかった」(640)。そのことは、偉大な医学者にとってどれほど時間が貴重なものかを示す。旅行の間に施された診察と移動における時間の節約は、媚びを売ることに時間を費やすカナリスの偽の天才と対照され、本物の天才の指標となる。これらの印しはモデストの目を逃れることはなく、彼女に「本当の天才についての正しい考え」を与える。大げさなことは何もせず、車の中で眠り、本を読み、普段の勤勉な生活を続けながら迅速に旅行する、本物の天才である医師に対し、カナリスは、「騒ぎを引き起こすことを期待して」(617)、「カナリス家の制服を来た御者が運転する」(623)目映いばかりの 4 輪馬車に乗って「シャレ」に現れる。これももう一つのうぬぼれの印しである。本物を探すための手がかりは旅行の仕方の中にもいろいろとあるが、それを読み解くためには、視線に慧眼さが必要である。

郵便馬車によって提案されているもう一つの旅行の仕方は、隠密の旅行である。名を明かさず、他人に旅行の目的を気づかれぬよう旅行するのだ。馬

車の中で、旅行者が匿名でいるということは、何も郵便馬車に限ったことではない。『人生の門出』において、「クークー」と呼ばれるピエロタンの私営の馬車で、身分を隠して旅するセリジー伯爵もいる。この場合、匿名でいることは、そうでなかったら得られないような情報を得ることに役立つ。『人生の門出』はそこに直接、小説の題材を見出しているし、ラ・ブリエールは、密かに調査をするために、郵便馬車でル・アーヴルに着き、彼が調べようとしている人々に見つからずに文通相手を見ることに成功する。

郵便制度は、郵便物の差出人、受取人にも「匿名」でいることを可能にしてくれる。「局留めという致命的な発明[8]」がなかったら、手紙を書く者たちは、本名を明かさないまま相手に返事を求めるなどということは出来なかっただろう。ある名前のもとに郵便物を探しに郵便局まで出向くという、郵便の配達制度と併存した制度こそが、ヴェールを被った手紙の受取人の存在を可能にしたのである。これらの受取人は、名を隠しつつも、手紙を見分けるために、誰か他の人間の名を用いざるを得ない。モデストは詩人に次にように頼んでいる、「あなたの手紙は、F.コシェ宛てに、ル・アーヴルの局留めでお出しください。」このフランソワーズ・コシェなる、かつて、姉の出奔先から連れ戻られた女中を、モデストは「頼まれた用事に関する、決して破られてはならない秘密を守り通すという条件で」、「父の帰還後は、平穏に暮らしてゆけるようにしてあげる」と口説いて共犯にするのである。こうして、金銭と秘密を引き替えに「協定」が結ばれ、この協定に参加することにより、二人の女性はまた、「郵便」に秘密を託すことにもなるのである。

秘密の作る不透明さは、手紙の移動を実行する「手」の不可視性によってさらに強められている。パリの私生活の情景におけるように二人の間を往復する従僕もいない。そこでは、『女性研究』のラスチニャックの手紙の場合ように、正しい住所さえ印されていない恋文の差出人の名を知るために、手紙を運んできた従僕が誰の家の者であったかを尋ねる場面が見られるのだが。郵便制度は、当然ながら、手紙を配達するために配達人を雇っている。モデストは、ラ・ブリエールが自らフランソワーズ・コシェを尾行し、アングーヴィルまでやってきたことを知り、女中に、もう「シャレ」まで手紙を持ってくるのはやめさせ、自分の住所を記した封筒を渡して、それにパリからの手紙を一通一通入れてル・アーヴルの郵便局で投函するよう言い渡す。モデスト自身が「シャレ」の入り口で、郵便配達人が通る時刻に待ち伏せるようになるのだ。郵便配達人は秘密に対して「視線」を注ぐ人間の一人とは数え

[8] Balzac, *Physiologie du mariage*, t. XI, p. 1094.

られておらず、巨大な郵便制度の手足の一部分にすぎないかの印象を与える[9]。

仲介者が見えないため、モデストの想像の中では、手紙は郵便によって、一種の「空飛ぶ絨毯」であるかのように空間を旅する。

> 郵便制度というものに感嘆しながら、彼女は小さな紙切れを追って空間を横切って行き、幸福に満たされていた。[...] 詩人の家や部屋を目の前に思い浮かべ、彼が手紙の封を切っているところを見、様々な憶測にふけった。(514-515)

手紙の移動は少女の魂の移動と重ね合わされ、『ゴリオ爺さん』の語り手が主張するように、手紙は魂の化身となるのである。

> 感情はあらゆるものに刻印され、空間を横切って行く。一通の手紙は一つの魂であり、繊細な心の持ち主がそれを最も豊かな愛の宝物とするほど、手紙はいとしい声の、実に忠実なこだまなのである[10]。

ここでは、声による直接的なコミュニケーションと、手紙による距離をおいたコミュニケーションとが近づけられているが、『人間喜劇』全体においては、この考えはしばしば否定されていることを忘れてはならない。『アルベール・サヴァリュス』は、このような手紙の概念に頼る主人公が現実によって裏切られる物語であり、声による交流がもたらす二人の間の透明性は、文通においては、文通者の間に横たわる、敵の侵入を許す不透明な距離に取って代わられるのだ。

しかしながら、まだ議論を先取りしすぎてはいけない。郵便によって保証されている匿名性は、少なくともモデストとっては、まさしくその不透明感ゆえに、非道徳性から逃れる手段と見なされている。有名な詩人に手紙を書くという計画を実行するに当たって、匿名の覆面は自分の女性としての名誉を危険に晒さないために役立つ。なぜならこの覆面は、フィクションの登場人物のような非現実的、幻想的な身分を彼女に与えるからだ。

> 私は、シェイクスピアの作品の女の子、演劇や文学の作品の登場人物の状態に留まっていたのです、その男の人が、魂が美しいのと同じように、実際もすばらしい人であるか知りたくなるまで [...]。(603)

---

[9] とはいえ Jean Hébrard が引用している配達人の描写は、必ずしも配達人たちが郵便の手を見えない物にするほど脱人格化されたものではなかったことを示している。Voir « La lettre représentée, les pratiques épistolaires dans les récits de vie ouvriers et paysans » in *La Correspondance ...*, *op.cit.*, dir. Roger Chartier, p. 285.

[10] Balzac, *Père Goriot*, t. III, p. 148.

彼女に言わせれば、この覆面は、恋と結婚に関係する文通において、文通相手の男性の名誉をも救うことが出来る。

> あなたを見た後でも、私はあなたを傷つけることなしに、拒絶の返事をすることができます。私は名を明かさずにいることを保証します。(554)

結局、彼女の考えの中では、郵便に支えられた恋のもくろみは、決して跡を残しはしないのだ。

> 「お聞き、不思議なせむしさん、ご覧なさいな」、と彼女は雲一つない空を指しながらいった。「さっき通っていった鳥の軌跡が見える？　私の行動は、この空気と同じくらい澄んだものなの、あれ以上に跡を残すことはないでしょう。」(574)

それゆえ郵便によるコミュニケーションにおいて二人の間に生じる不透明さは、決して人の視線に触れることないまま、秘密を葬り去るはずだった。

ところが、一つの経験がすでにこのような文通の姿に異議を唱えていても良いはずである。モデストの考えとは裏腹に、手紙は現実に道に印しを残し、恋人を彼女の家まで導いてきたでないか。彼女が想像した抽象的な往路を、帰路が具体化するのである。

> カナリスでなくて良かったと考えながら、若き会計検査院主任検査官は、或る決まった日に返事を書くことを予告した手紙を書いた後、ル・アーヴルの郵便馬車に一つ席を取った。[...]　彼はわざわざ郵政省の長官から、ル・アーヴルの郵便局長宛てに、この件については口をつぐんでよろしくやってあげて欲しい、という一筆を取り付けた。こうしてエルネストは、フランソワーズ・コシェが郵便局にやってくるのを見、何気ないふりをして彼女についていった。彼女に牽引される形でアングーヴィルの高台にたどり着いた彼は、「シャレ」の窓辺にモデスト・ミニョンを見出した。「どうだった、フランソワーズ」、少女は尋ね、女中が「お嬢様、一通ございましたよ」と答えるのが聞こえた。(529)

ラ・ブリエールはまるで手紙に寄り添った影であるかのように、匿名の旅行者でいるために様々な手筈を整えている。郵便が保証する不可視性は、ここですでに、覆面、不透明さの向こう側を覗く試みに貢献しつつある。

確かに、郵便は、勝つためには悪知恵を使わざるを得ない『人間喜劇』の情報戦争において、武器の宝庫となっている。この小説の中では、それぞれの登場人物が、遠くにいながら相手のしていることを探り、それに圧力をか

けようとする欲望にかられ、これらがぶつかりあう場面があることを思い出すべきであろう。カナリスが、恩人であり、愛人であるショーリュー公爵夫人をパリに残し、ル・アーヴルの豊かな一人娘の持参金をさらいに行った時のことだ。モデストの見張り役を自認する不思議なせむしのビュッチャは、カナリスに知られずに、ショーリュー夫人の召使いのフィロクセーヌと手を結ぶことに成功し、彼女といとこ同士であることにする。詩人は、ル・アーヴルに長く逗留していることを公爵夫人がどう思っているか気になって仕方がなく、長く迷った末、彼の秘書を「青白く、どうということのない、筋張った」跡取り娘と結婚させるために来ているのだと書き送る。しかし、恋人たちはパリで一週間に 4、5 通は手紙を書き合っていたのだから、公爵夫人はすでに不安の絶頂にあり、詩人の企みよりも有効な陰謀を先に実行していたのだ。

> 彼女はフィロクセーヌに従兄弟への手紙を書き取らせ、ビュッチャの返事によって正確な情報を掴んだところだったが、これは五十女の自尊心には少し決定的すぎるものであった。(685)

このビュッチャの返事は、カナリスの言い訳の手紙より 12 時間早く着いていた。不思議な力を持ったせむしは、手紙という手段によって舞台裏で糸を引き、閨房に閉じこめられているはずの、パリ社交界の女性の心情の秘密をも操作して、跡取り娘の周囲に繰り広げられる闘いに、彼女をも引き入れることに成功するのである。

しかし、ビュッチャだけが詩人を求婚合戦の土俵から追い出すために手紙を利用するわけではない。求婚者の一人、エルーヴィル公爵の姉は、モデストの持参金に執着しており、カナリスの行動をショーリュー公爵夫人に言いつけるため、エルーヴィル公爵にグランリュー公爵宛てに手紙を書かせる。なぜなら、グランリュー公爵は、毎晩、ショーリュー公爵とウィストをするからだ。この込み入った作戦もまた、成功を収める。ショーリュー公爵はこの手紙のことを妻に話し、夫人は一度おさめた怒りを思い出して、「物事を自分の目で確かめる」ために、小説の最後の舞台である、王族の狩りに参加することを決めるのである。

郵便網の内部における動きは、小説の中で二つの姿を見せる。片方は非常に具体的であり、登場人物たちが、その路線を使って旅する仕方によって性格づけられている。もう片方は、抽象的で不透明なものだ。この抽象化は、一方で文通における覆面、仮面を繁殖させ、他方では逆に、登場人物たちが

他者の目に隠していることを暴くのに貢献し、面と向かって現実の視線のもとに行われるコミュニケーションとは対極にある、非常に間接的なコミュニケーションに機会を与える。小説の最後で、登場人物たちは「シャレ」において出会うが、それでも遠距離にいながらの策略は続けられ、これはカナリスのまやかしを明るみに出すことに一役買いながら、小説をもう一度旋回させ、本当の出会いの場、本物の直接のコミュニケーションの方へと向かわせるのである。

また、通信網の抽象化は別の機能をも担っている。モデストは郵便を、何の軌跡も残さずに物を移動させ、二つの魂の間の透明さを実現しながらメッセージを伝える情報伝達機関と見なしている。この、「見えないもの」の伝達機関という郵便の概念は、小説の中で一度裏切られるものの、結末で、文通によって得られた判断が正しかったことが証明されることによって、もう一度蘇る。その上、内面の生活から生まれる「目に見えないもの」は、「文明」のはびこらせるもう一つの「目に見えないもの」と対立させられた形で、小説の中で常に価値を認められていることがわかるであろう。

3. 出版社

『モデスト・ミニョン』がノルマンディー地方で最も持参金の多い娘の結婚の物語であり、貴族の投機家であるシャルル・ミニョンの成功の物語であり、その中でしばしば財産の額が問題になっているなら、バルザックは、この「経済」小説の中に、「文学の、形而下的な、ひいては経済的な側面」[11]を書き込むことも忘れてはいない。カナリスは、このことをミニョン家の客たちに知らしめようとする。

> 芸術は疑いなく商業であり、また商業を前提としているものです。一冊の本は、今日では、その作者に一万フランといった額の利益をもたらします。(646)

ところが、芸術が金銭的に養うのは書物の作者ばかりではなく、本屋—出版社でもある。彼らは、芸術の中から利益を汲み取るのだが、その際、書物を作るばかりでなく、作家までをも製造するのである。カナリスの詩集を出版するドーリアは、「俺がカナリスをつくったのだ！」と叫ぶかもしれない。彼には恐らくそう叫ぶ権利があるのだ。彼は、詩人の詩集を作るのみでなく、

[11] Joëlle Gleise, « Séduite et épousée : le stéréotype de la lecture dans *Modeste Mignon* » in *Le Moment de La Comédie humaine*, p. 177.

詩人の肖像、「イメージ」をも作り出すからだ。

この肖像は、小説の中で、特にモデストがル・アーヴルのある本屋で見つける「嘘だらけの」カナリスのリトグラフィーによる肖像画によって表象され、具体化されている。モデストはこれを買い、自分の部屋に飾る[12]。このリトグラフィーとの出会いが、小説のヒロインを、夢想の段階から行動の段階へ、読書から手紙を「書く」段階へと移行させることは注目に値する。肖像は、視覚的な接触によって、読者の中にある天才の世界に近づきたいという欲望に定まった標的を与え、それを具体化するのである。

しかしながら、この「崇高な」願望の裏側は商業化されている。出版社は、言ってみれば、殊に芸術家の「肖像」を貪欲に探し求める女性読者の目の中に利益を見出すのだ。7 月王政下の印刷物の世界における、大衆に向けて世に送られた商品としての« image »の増加、またその現象の想像力への影響が、ヒロインがリトグラフィーの肖像画によって自分の崇拝の対象を選ぶという、この時期の直前に位置するエピソードによって予告されている。

このリトグラフィーは、語り手の攻撃の対象となる。彼は、詩人の顔を「商業的な必要に迫られて崇高な物とする」(510)下劣な意図を告発する。

> 皆さんも、これらの素描がどんなに嘘つきなものかご存じだろう。あたかも有名人の顔が公共の所有物であるかのようにして、有名人の人格をこき下ろす、下劣な投機の産物である。(510)

このように、作家は、最も個人的な所有物、体の一部が、切り離され[13]、「本屋の棚」(510)の上に晒されることへの強い不安を表明している。この点からすると、リトグラフィーの上に引きつけられる視線は、「文明の視線」と通ずるものがある。なぜなら、前者の視線は、その前にカナリスとダルテスの顔を同じレベルに置くことによって、これらの像を並べて一種の目録、作家

---

[12] モデストが密かに見つめるカナリスの肖像と、アルベール・サヴァリュスが自室に飾る恋人アルガイオロ公爵夫人の肖像は、二人の登場人物が部屋に閉じこもり、崇拝の対象として眺めるという点では似通うものの、画像の性質によって異なった物となっている。リトグラフィーは、版画の一技法によって作られた、同一で複数の像の一つにすぎず、「見る」欲望をかき立てるために作られるとも言えるが、公爵夫人の肖像画の方は、これがオリジナルで、唯一であることが意味を持つ。なぜなら、公爵夫人はサヴァリュスに本物を、夫にその複写を与えたからである。この肖像画においては、描かれている人物を予め知っていることが、画像に価値を与え、そこに視線を引きつけるのである。

[13] バルザックにおける「切り刻まれた身体」の強迫観念については、以下を参照。Nicole Mozet, "1831 : « Concevoir le crime sans être criminel »" in *Balzac au pluriel*, PUF, 1990, pp. 11-28.

の顔の「見本[14]」を作り、同時にこれらの顔をイコノグラフィックでコード化された言語(バイロン的なポーズ、「あらゆる詩神が持たねばならない」(510)ユゴー風の広い額、風になびく髪、等)に置き換え、顔の価値を、それがかき集める金額で測るからである。バルザックが 10 年前に手紙の中で表明している意見は、同じ論理に基づいている。「リトグラフィーは、知の進歩から生まれた神格化であり、言ってみれば、あらゆる未来の概念を殺した文明によって割引された崇拝である[15]。」出版とは、出版社が作家の存在に関する情報を集め、それを細かくちぎり、組み合わせてパズルを作る、そして、それに対してお金を払う用意のある読者たちの視線に向けて、このように作られた作家像を紙に刷り、世に送る、ということでもあるかもしれない。

カナリスは、ロボット化された作家の風刺画でもある。文明化された文壇のロボットとして、彼はこのような他人によって作られたイメージを生き、コード化された「ロマン派の詩人」の外見を喜んで着込む。「ポーズ」を取ることを彼に教えるのが、ショーリュー公爵夫人でもあるのは矛盾ではない。なぜなら、この詩人は、文学とサロンの協力の産物でもあるからだ。

> カナリスは、彼のしぐさのコレクションの中でも最も美しい姿勢の一つで、暖炉のところでポーズを取りながら答えた。(643)

カナリスを眺めることは、まるで、それぞれの画像のポーズが大衆の目を魅惑するように研究されている、リトグラフィーの画集をめくっているようなものである。彼は出版社—本屋の看板のもとに、製造された「像」として並ぶ。そこではモデルと製品の役割が逆転しているようにも思えるが、もしかすると、モデルなど本当は存在しないのかもしれない。この商業化された文学界では、作家が自分の「真実の」人格など求められていないことを恐れ、カナリスのような亡霊的な製品と自分を区別する必要を感じたとしても、決して不思議ではない。そしてこの亡霊は、彼の上に「詩人」と人が呼ぶものの「イメージ」を求めて集まってくる視線なしには、存続し得ないだろう。

---

[14] バルザックはこの言葉を、彼の肖像画をリトグラフィーによって作らないかという誘いを断るために書かれたFerdinand Bellizardへの手紙の中で用いている。「私がお断りするにあたっての後悔をますます少なくする理由は、このリトグラフィーのお勧めのために、あなたが必ずや代わりの人間を、まだ汚れていない彼らの「栄光」をこのような「見本」によって喜んで汚すであろう、パリにうようよしている偉人たちの中に見つけることができるだろうということです。」(この手紙は1833年4月3日、パリで書かれた。Voir Roger Pierrot, « Quinze lettres de Balzac, Supplément à la Correspondance », in *L'Année balzacienne* 1972, pp. 351-352.)

[15] *Ibid.* p. 352.

これらの視線、隠されて見えない大勢の読者の、特定できない複数の視線こそが、カナリス風の詩人を作るのである。女性読者の視線、サロンの女性たちの視線、そしてカナリスのナルシシックな視線自体もが、それぞれ其処に貢献しているのだ。

4. 新聞

『モデスト・ミニョン』において、新聞記事は、まず、小説の二つの重要な局面において現れる。それは、ミニョン家の破産に次ぐ父シャルル・ミニョンの外国への出発と、シャルル・ミニョンのフランスへの帰還であり、この二つの出来事は、家庭にとって重大であると同時に、経済的な出来事でもある。初めの記事が『ル・アーヴル通信』に載った時、父シャルルはすでにフランスを離れ、外国に財産を探しにゆくため、船に乗っていた。語り手によって「この恐ろしい、簡潔で、力強い、誠実なル・アーヴルのトップ記事」(490)と呼ばれている記事は、ル・アーヴルの住民に、予期されていなかった破産を知らせ、「証券取引所で、港で、あらゆる家の中」で、「一致して、同情の声」を形作る。記事の調子に噂が答え、こうして町の噂、「絶え間ないおしゃべり」が生まれる。ル・アーヴルの人々は、ミニョン夫人とその娘を訪ねに来るが、彼女たちが訪問を受けようとしないため、これらの噂は、15日後には、「もっとも深い忘却」に取って代わられる。小説は、大衆の形を取る新聞記事の受信者の姿を描いた後、事件の知らせの家族による受信と、無名の大衆による受信との出会いを拒むのである。

もう一つのシャルル・ミニョンに関する記事、彼のフランス帰還を知らせるそれは、ラトゥルネルがデュメイに語る言葉の中に現れる。

> あなたは大将にパリで会えるはずです、と、公証人は言った。「今朝の『商業新聞』の港湾情報の中で、マルセイユの欄に、ほら、ご覧なさい」、と、彼は新聞を見せながら続けた、「ベッティナ・ミニョン号、船長ミニョン、10 月 6 日入港。今日は 17 日だ。今頃はル・アーヴル中が、我らが主人の到着を知っているに違いない。」(586)

登場人物が語るこの言葉は、背景に響くル・アーヴルの人々の噂話を想像させる。ここで肝心なのは、父の帰還は前もって彼からデュメイへの手紙によって予告されてはいたものの、家族とその友人たちがシャルル・ミニョンのフランスへの実際の到着を知るのは、新聞記事の他の読者たちと同時でしか

ない、ということである。それは、電話のような、より迅速で個人的である通信手段を欠いていた時代の通信網の事情を考えれば、当然のことかも知れない。こうして、新聞は、あらゆる読者に対して同時に、報道される事件と彼らとの関係とは無関係に、同じ量、同じ質の情報を与えるのである。

ある別の新聞記事は、モデストの姉ベッティナを誘惑したパリの若者、ジョルジュ・デストゥルニーに関するものである。語り手はこう述べている。「幾つもの新聞の紙面がジョルジュ・デストゥルニーの裁判で賑わった、彼は博打における不正行為の常習犯として警察に捕まったのだ」(492)。ところが、語り手によって示唆されている出来事の反響の大きさにも関わらず、これらの記事の受容の描写はない。語り手はこの男が、ミニョン家の破産を知ってベッティナを捨て、一人海外に逃亡したことのみを語っている。彼も恐らく新聞によってこの破産を知ったのであろうから、小説の読者の想像の中では複数の新聞記事が交錯する。しかし、語り手は淡々と、家の破産と自分が捨てられたことを知って重病に陥って家に帰り、死んで行くベッティナの運命を語るのみである。

最後の記事は、小説の終わり近くにあって、詩人がかつて歩んでいた道を再び見出し、望んでいた成功を手に入れたことを知らしめるものである。

> ヴェルヌイユ公爵の招待客たちは、ロザンブレーに 5 日間滞在した。最後の日に、『ガゼット・ド・フランス紙』は、カナリス男爵のレジオンドヌール勲三等に叙せられ、カールスルーエ駐在公使に任命されたことを告げていた。(713)

語りの調子はあっさりしており、新聞の片隅の記事を想像させるのみで、それを登場人物の目を通して我々に伝えることすらしていない。

これらの新聞記事のメッセージの受信者とは誰だろうか。父親の出発と帰還を知らせる記事を考えれば、個人の名を持たない大衆こそが、それらの記事の複数の受信者となり、すぐさま、その内容に関する噂の、特定しがたい発信者に変身することがわかる。また、最後の二つの場合のように、記事の内容が語りに取って代わるなり、新聞のメッセージの受信者は、我々読者でもあるということが言えるだろう。新聞記事は、小説の中で、話し手の姿が見えないひそひそ話をかき立てるのと同様、小説の読者に情報を与える役割を果たしている。

5. 噂

港で、証券取引所で、我々がすでに見てきたように、ミニョン家の運命は噂の的になっている。これらの町の噂は、小説の中で、単に情報を受け取る役割を果たしているのみでなく、情報を発信する役割をも担っていることに目を向けるべきだろう。初めに、これらの噂はル・アーヴルの町の中に広がり、モデストたちの住むアングーヴィルは比較的、この噂の圏内から外れて位置していることに注目したい。アングーヴィルは、ル・アーヴルに対して、「隣接しているが、切り離された避難所16」なのである。ル・アーヴルの家の扉の前には三百通の名詞が置かれていたにも関わらず、父の命令通りアングーヴィルの高台にある「シャレ」に避難したモデストと母親は、彼女たちを見舞った不幸についての噂があっと言う間に消え去るのを知る。もう一つの見地からは、噂は、モデストの孤立を強める役割を果たしている。家族の不運についての通行人の悪口は、少女の現実への嫌悪感を助長し、彼女をますます内面の生活へと押しやるのである。

しかしながら、避難所であるからして、「シャレ」は一時的にしか外界から遮断されていない。父の帰還を境に、外側へとより開かれるのである。カナリスが詩人としての栄光を見せびらかし、秘書を押しつぶそうとして、派手に自分のル・アーヴル到着の噂を広めた時、「大衆の間に広まった噂のいくつかがモデストのほうへと上ってきた」(610)。これから見て行くような意味で、世間から離れた「シャレ」の役割は、父の帰還と同時に終わるのである。

父、シャルル・ミニョンは、彼の莫大な財産についての噂を恐れている。そのような噂は、娘の持参金目当ての若者を「シャレ」に引き寄せかねないからだ。ル・アーヴルの港の視線をかわすため、彼はマルセイユとパリを通って、其処に一部の財産を置いてくる。財産についての噂の被害者である長女を失った苦い経験が、彼にこの教訓を与えたのだ。ここに我々は、小説の二つの大きなテーマである、お金と結婚の連結点を見出す。「シャレ」の世間から隔離された状況は、こうしてみると、情報の循環を遮る役割を果たしているのだということがわかる。問題は次のようなものである。財産に関する噂が「シャレ」に連れてくるタルチュフにだまされないためには、どうしたらよいだろう？　この小説は、集団のコミュニケーションの世界におけるタルチュフの物語である17。

---

16 Nicole Mozet, « Le Havre : La règle du jeu », *op.cit.*, p. 266.

17 この作品の起源の一つは、バルザックが温めていた、主人公が女性のタルチュフ(または男性

シャルル・ミニョンの帰還後、すべての登場人物が集う場面の中では、それぞれが噂を自分の味方に付けるべく闘うことになる。小説は、情報の循環を阻んでいた壁を崩壊させるわけだ。カナリスは他の求婚者たちに一歩先んじるために、いち早く噂を利用とする。「彼は、ル・アーヴルへの自分の到着が引き起こすに違いない騒ぎが、「シャレ」にも響いて行くに違いないと考え、これを有利に使いたいと思った。」(618)

逆をつく形で、ビュッチャは港の噂を利用して、隠されたカナリスの汚い意図を暴こうとする。ラ・ブリエールとカナリスの二人の男が同じ目的の試練を受けるが、これは、彼らが財産目的でモデストと結婚したがっているかどうかを調べるためのものである。この試練の基礎を成すのは、非常にバルザック的なコミュニケーションの形態であるが、それはもっとも、小説の初めから存在しているものである。つまり、ある登場人物の仮面を外すために、偽の情報を与えて反応を見る、というものだ。少女の持参金が、彼女自身が申告していた額よりも少ないことを知らされたラ・ブリエールは、喜びのあまりシャルル・ミニョンの首に飛びつく。しかし、カナリスのほうは、ビュッチャの罠にまんまと引っかかる。ビュッチャは、町で、詩人の従僕の耳に、シャルル・ミニョンの財産は「つつましい (modeste)」という噂を入れさせ、我にもなく真実を語ってしまうほど酔っているふりをして、自分自身で、この情報が正しいことを詩人に告げる。実際には、彼は自分の友人たちを使って従僕を騙させたのだが、また、ル・アーヴルの町のミニョン家をおとしめるような噂を利用したことも事実である。成功して戻ったにも関わらず昔の知人たちを招待せず、アングーヴィルからル・アーヴルに下りて来ようともしないシャルル・ミニョンに対する嫉妬心が、実は彼の財産はたいしたものではないという噂を生み、シャルル・ミニョンはわざとこの噂を否定せずにいたのだ。作戦はまさしく効果的であった。詩人はモデストの前で突然態度を変え、ぼんやりし始める。噂という、常に発信者と受信者の両面を翻し続ける捉えがたい動的な形態は、その捉えがたさ故に、タルチュフ狩りの道具となるのである。

終わりに

噂は、集団の好奇心を担った、私生活への視線から生まれる。それらは十

という考えもあった)となったであろう小説の案にある。Voir Maurice Regard, « Introduction », p. 448.

九世紀の発明ではないが、我々の扱っている小説の中では、噂が、この時代に特に印刷物の分野において発展しつつあった、通信者間にある程度の距離を前提とした集団的コミュニケーション網と緊密に結びついて機能していることがわかる。フランスの地方都市は、まだ、其処でそれぞれの個人が区別され、情報交換の中で個人間の関係が明らかであるような透明さを保っていたはずだが、上のような意味でも18、パリを中心とした通信網に脅かされていることになる。主体(情報の発信者・受信者)が曖昧になってゆく通信の形態を捉え、バルザックは小説の中で、その不透明さを利用することによって、このようなコミュニケーション自体が与える不安を解決し、商業化された文学が生む幽霊を追い払う術を提示した。そこで標的となるのは詩人カナリスであり、このパリの人工の花こそが、皮肉にも、田舎の町の噂の不透明さの犠牲者として選ばれるのである。

18 Nicole Mozetは « Le Havre : La règle du jeu... » (*op. cit.*) の中で、この小説を、バルザック小説における "province"の「白鳥の歌」として読むことを提案している。